

(2) 縄文時代中期の松本盆地における下呂石製石器

村井 大海

1 はじめに

氏神遺跡は、東筑摩郡朝日村西洗馬に所在する。鎖川支流の内山沢左岸の河岸段丘上に立地し、周辺には熊久保遺跡や長野県埋蔵文化財センター（以下当センターと言う）が2016・17年度に発掘調査を実施した山鳥場遺跡・三ヶ組遺跡が分布する。2020年度の当センターの発掘調査において縄文時代と平安時代の遺構と遺物が出土した。

縄文時代の遺物は、中期初頭の五領ヶ台式と中葉の新道式、藤内式に含まれる土器のほか、それらの土器に伴い石器が出土している。上記の遺物は2021年度の本格整理において資料化および分析を実施し、報告書を刊行予定である。これらの土器、石器の中に遠隔地との関りを見いだせるものが認められる。関西の特殊凸帯文系土器と岐阜県下呂市湯ヶ峰を原産地とする下呂石を原材料とする石器である。そこで、本稿では下呂石製石器に焦点をあて、松本盆地の縄文時代中期における遠隔地石材の搬入形態および獲得方法を把握し、その利用背景を予察したい。

2 氏神遺跡出土の石器群

氏神遺跡では総計1450点の石器が出土している。これは基礎整理作業が終了した時点での認識であり、今後の本格整理作業における集計で、点数や器種分類等に修正の可能性があるため、詳細な点数は差し控えるが、そのうち7割以上は剥片や碎片、石核等の石器製作に伴う残滓である。石鏃や石匙、石錐等の小形の剥片石器や、打製石斧等の大形の剥片石器は、それぞれ全体の1割に満たず、石皿や台石、敲石、凹石等の礫石器が1割強ほど認められる。

石材を見ると、出土点数では黒曜石が突出しており、全体の7割近くを占める。黒曜石は科学分析を実施しており、分析した黒曜石の95%は星ヶ台群、5パーセントが鷹山・小深沢群のものであった。この黒曜石の産地傾向は近隣の熊久保遺跡

と一致する。砂岩や泥岩、粘板岩は合わせて全体の2割ほどである。これらの堆積岩は遺跡の近くを流れる内山沢や鎖川で一般的に採取できる岩石である（杉木2019）。残りの1割は、本稿で問題となる下呂石のほか、チャート、安山岩、流紋岩等の岩石が利用されている。チャートは砂岩等の堆積岩同様に遺跡近隣で採取することができるが、下呂石、安山岩、流紋岩は採取することができない。

ただし、重量比で見ると、石材構成の印象は大きく異なる。遺跡出土の石器の総重量は85kgほどになるが、黒曜石はそのうち2kgほどで全体の約2%を占めるに過ぎない。ほとんどは砂岩や泥岩、粘板岩等の堆積岩で、合わせておおよそ70kg、全体の80%ほどを占めている。

黒曜石は出土石器の大半を占める剥片等の石器製作の残滓や石鏃等の小形の剥片石器に利用されている。小型の剥片石器には切る、削る、穿孔等の機能が考えられるが、これらの機能を満たすためには、割れ口が鋭い、細粒緻密な岩石が適している。これらの特徴をもつ岩石はチャートを除いて遺跡近くでは採取できないため、直線距離で25kmほどの距離がある星ヶ台を原産地とする黒曜石を利用したのだろう。ただし、小形の剥片石器の製作に大形の原石は必要ない。黒曜石の多くは剥片や石核等の残滓のため、遺跡には原石や石核状態で搬入したと考えられるが、この時の運搬コストの低減をはかるため小形の黒曜石原石または石核が積極的に利用されることになり、その結果、出土点数は多いが、総重量は軽くなる。長距離を運搬するためのコストの低減が計られている点、原石または石核の状態で遺跡に搬入している点、小形の剥片石器の大多数が黒曜石を原材料としている点等を考え合わせると、黒曜石の獲得方法は直接採取の蓋然性が高い。

一方、砂岩や泥岩、粘板岩は打製石斧等の大形

剥片石器や砥石、敲石等の礫石器に利用される。これらの石器は土掘や物を叩く、研ぐ等の機能を有すると考えられる。これらの機能を満たすためには細粒緻密である必要はないが、衝撃にある程度耐性がある、大形の岩石が適している。このような石質の岩石は遺跡近隣に分布しており、大形の岩石を遺跡に搬入する際の運搬コストを低減するため、積極的に利用したと考えられる。したがって、遺跡近隣で採取できる大形の砂岩や泥岩、粘板岩が利用されることになり、出土点数は少ないが、総重量は重くなる。

下呂石はどうだろうか。下呂石製の石器は縄文時代中期初頭、五領ヶ台式土器を伴う堅穴建物跡の埋土から剥片（第1図-1）と二次加工ある剥片（第1図-2）、上記の堅穴建物跡とほぼ同時期と思われる土坑から剥片（第1図-3）が出土している。1は長さ3.3cm、幅2.2cm、重量5.36gである。背面右側面の自然面を打面とし、下側の剥離面から上側の剥離面に連続剥離をした後、打面を90度転移して打撃した結果得られた剥片である。背面左側面には折面が認められるが、これは最終打撃の際に生じたものであり、意識的な折断ではない。2は長さ4.4cm、幅6.0cm、重量34.30gである。背面左下の剥離の後、打面を90度転移して背面左下を剥離、その後自然面を打面として、背面右側から連続剥離を行ない、打点を後退して打撃した結果得られた剥片の下端に連続的な二次加工が施される。3は長さ5.3cm、幅3.5cm、重量21.75gである。背面右側からの打撃により下部の剥離面から剥離した後、打面を90度転移し、単設打面からの打撃により得られた剥片である。背面右側には折面が認められるが、1と同様に最終打撃の際に生じたものである。背面左側には自然面が認められる。2と3の自然面の特徴は角礫または亜角礫と推定され、触感はややなめらかであるが、爪状の衝突痕は認められない。この自然面の特徴は、齊藤基生氏や中村由克氏によれば、原産地湯ヶ峰からほど近い、下呂市域の河原で採取できる原石に認められるとのことであり（齊藤2005、中村2007）、原石の採取場所は原産地に近い河原で

あったと推定する。

3 縄文時代中期松本盆地における下呂石製石器 (1) 朝日村

氏神遺跡の他、山鳥場遺跡と熊久保遺跡第10次発掘調査において下呂石製の石器が出土している。

山鳥場遺跡では3793点の石器が出土している。内、3035点は石核や剥片等の石器製作に伴う残滓であり、これらの主体は黒曜石、チャート、砂岩である。石鏃や石錐等の小形剥片石器には黒曜石が、打製石斧等の大形剥片石器には砂岩や粘板岩が、敲石や凹石、磨石等の礫石器には砂岩が主体的に利用される。下呂石は後葉の唐草文系土器の時期に属するSB16より石匙が1点（第1図-4）、検出面のため時期は不明だが石鏃（第1図-5）が1点出土している。

熊久保遺跡第10次調査では1810点の石器が出土している。大半は黒曜石や砂岩、頁岩、チャートの石核および剥片である。製品は617点出土しており、石鏃や石匙、石錐等の小形剥片石器には黒曜石が主体的に利用され、チャートもごくわずかに利用される。打製石斧等の大形剥片石器や敲石、台石等の礫石器には砂岩や頁岩が主体的に利用されている。下呂石は中葉の井戸尻式から曾利式期の第6号住居址から石鏃が1点出土している（第1図-6）。

(2) 山形村

殿村遺跡において下呂石製石器が確認できた。当遺跡では596点の石器が出土しており、石鏃や石錐には黒曜石およびチャートが、石匙にはチャートが、打製石斧等の大形剥片石器や敲石、凹石、磨石等の礫石器には砂岩や粘板岩が主体的に利用されている。下呂石は後葉の曾利式期の10号住居址から出土した石匙No.1、同時期の27号住居址から出土した石匙No.5の2点が認められる¹⁾（第1図-7、8）。

(3) 塩尻市

縄文中期の大規模集落として著名な平出遺跡をはじめ、峯畑遺跡、剣ノ宮遺跡D地区で下呂石製石器が確認できた。

平出遺跡では環境整備事業に伴い2002年～2011

年に行われた発掘調査において、住居内から1224点の石器が出土している。石鏃や石匙等の小形剥片石器には黒曜石やチャート、打製石斧等の大形剥片石器や敲石等の礫石器には砂岩や凝灰岩、ホルンフェルスが主体的に利用されている。下呂石は初頭の九兵衛根式期のJ-75住居跡から石匙が1点（第1図-9）²⁾、中葉の新道式期のJ-29住居跡から石匙、同時期のJ-51住居跡から石鏃がそれぞれ1点出土している（第1図-10、11）³⁾。

峯畑遺跡では397点の石器が出土している。石鏃や石錐、ピエス・エスキューには黒曜石、石匙にはチャート、打製石斧等の大形剥片石器には頁岩、敲石等の礫石器には砂岩や凝灰岩が主体的に利用されている。これらの石器の内、石鏃1点が下呂石であることが確認できた⁴⁾（第1図-12）。中葉の井戸尻式期の2住からの出土である。

剣ノ宮遺跡D地区から出土した石器は、製品708点が報告されている。石核や剥片等を含めるとさらに数は増える。石鏃等の小形剥片石器には黒曜石やチャート、打製石斧等の大形剥片石器には砂岩等が主体的に利用されている。石核や剥片類の大半は黒曜石であった。下呂石は二次加工ある剥片に1点確認することができた（第1図-13）。二次加工は背腹両面に施され、腹面左上部には微細剥離が認められる。石鏃の失敗品の可能性がある。グリッド6Hの検出面からの出土であり、詳細な時期は不明だが、周辺遺構の帰属時期に鑑みれば、縄文時代中期の所産であろう。

（4）松本市

松本市では一ツ家遺跡、小池遺跡、川西開田遺跡において下呂石製石器が出土している。

一ツ家遺跡では1947点の石器が出土しており、石鏃や石錐には黒曜石が、石匙にはチャートが、打製石器等の大形剥片石器にはホルンフェルスや砂岩、頁岩が、敲石、凹石、磨石には石英閃緑岩や砂岩が主体的に利用されている。下呂石製石器は初頭の梨久保式期の82住からスクレイパーが1点出土している（第1図-14）。

小池遺跡は4498点の石器が出土している。出土石器の器種および石材の利用形態は一ツ家遺跡と

ほぼ同様である。下呂石製石器は中葉の井戸尻式期の162住から石鏃が1点（第1図-15）、同時期の164住から石鏃およびスクレイパーがそれぞれ1点出土している（第1図-16、17）。

川西開田遺跡からは7080点の石器が出土している。石核および剥片等の石器製作に伴う残滓の出土が最も多く、これらの石材は黒曜石やチャート、砂岩、頁岩を主とする。製品は石鏃や石錐、石匙等の小形剥片石器には黒曜石およびチャートが、打製石斧等の大形剥片石器には頁岩が、凹石には安山岩が主体的に利用されている。下呂石製石器は初頭から中葉、九兵衛尾根式期、猪沢式期、新道式期の住居址、溝、土坑から計8点出土しており、内訳は石匙1点（第1図-18）、石錐1点（第1図-19）、ピエス・エスキュー1点（第1図-20）、二次加工ある剥片3点、微細剥離痕ある剥片1点、石核1点である。

エリ穴遺跡は、中期から晩期にわたり長期間継続する大規模な集落遺跡である。87462点の石器が出土しており、77507点は石核や剥片および碎片、原石等の石器製作に伴う残滓である。内、黒曜石の石核が413点、剥片および碎片は71142点を占めており、黒曜石原石および石核を大量搬入し、石器製作が行われたことは明確である。石鏃や石錐には黒曜石とチャートが、石匙にはチャートとホルンフェルスが、打製石斧にはホルンフェルスや頁岩が、敲石や凹石、磨石には砂岩や安山岩が主体的に利用されている。下呂石製石器は211点出土している。器種は石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片、剥片および碎片である。石核は認められない。ただし、中期の所産と判断できる資料は中葉から後葉、新道、藤内式期から唐草文の時期と見られる16住から石鏃が1点見られるのみである（第1図-21）。

（5）安曇野市

安曇野市では市域を代表する縄文時代中期の遺跡である他谷遺跡の他、東小倉遺跡の資料を実見したが、下呂石製の石器を確認することはできなかった。

4 下呂石製石器の搬入形態と利用背景

氏神遺跡では、下呂石製の石器は二次加工ある剥片および剥片の3点であり、剥片を剥離するための石核や二次加工時に生じる碎片は見いだせなかった。石器に残された自然面の状態も勘案すれば、原産地にほど近い河原で採取した原石を、採取地、または他の遺跡に運搬し、そこで二次加工ある剥片および剥片の状態に加工したものが搬入されたと考える。

他の遺跡においても状況は氏神遺跡とほぼ同様である。ほぼすべての遺跡で下呂石製石器の出土は一桁におさまり、明らかに客体的な存在である。エリ穴遺跡では、211点出土しているが、ほとんどは後晩期の遺構および包含層からの出土である。川西開田遺跡では石核が1点出土しているが、石匙や石錐、二次加工ある剥片を製作する際に生じる剥片および碎片は確認できない。また、当遺跡の整理作業では接合作業が精力的に実施されているが、下呂石の接合例は見いだされず、下呂石の加工が行われた可能性は非常に低いと考えざる負えない。したがって、松本盆地において縄文時代中期の遺跡から出土する下呂石製石器は、他地域で加工を施された製品や二次加工ある剥片、石核、石核から剥離させた剥片の状態でもたらされたと判断すべきである。これらの下呂石製石器は、原産地近隣までの直線距離が60km以上あること、出土点数が非常に少ないこと、当遺跡への搬入形態等を総合的に考えると、交換による他の集団を媒介とした間接的な獲得の可能性が高いと考える。

下呂石製石器の交換元であるが、木曽地域、特に王滝川流域に展開する集落にその可能性が高いと見ている。長野県において木曽地域は、下呂石がまとまって出土する地域であるが、特に王滝川流域に立地する王滝村大岩橋遺跡や崩越遺跡は下呂石製石器の出土数が、黒曜石やチャート製の石器に匹敵し、剥片も非常に多い。原石、石核、剥片の状態でもたらした下呂石を加工したのだろう。王滝川の上流部には水無沢が流れ、その源流近くには鞍掛峠が位置し、そこを越えれば角礫や亜角

礫の下呂石が採取できる乗政川に合流する竹原川の源流にたどり着く。これらの河川、峠伝いに王滝川流域の遺跡に搬入し加工された下呂石製石器が、松本盆地に展開する縄文時代中期の集落にもたらされたものと推察する。

共伴する土器を見ると下呂石製石器の松本盆地への交換による搬入は縄文時代中期において継続して認められる。下呂石製石器は、石鏃、石匙、石錐、スクレイパー等の小形剥片石器のほか、二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片、剥片、石核である。下呂石を原材料とする石器としては一般的なものであり、特定の器種に偏る傾向は見いだせない。また、松本盆地では、黒曜石やチャート等、これらの石器の原材料として優良なものが近隣に分布しており、下呂石を利用する必然性は認められず、事実、出土数も少ない。石器組成から下呂石製石器を除外したとしても、数値上の影響はほぼない。さらに、石核や剥片等の素材として利用するため交換したように見えるものも、実際には当地で加工の痕跡は見いだせない。石鏃の失敗品すら交換している。以上の状況に鑑みれば、下呂石製石器の交換および利用は、機能的および経済的な理由に求めることはできない。公的な統治機構を持たない社会において、交換の役割は機能・経済的理由以上に、集団や個人間の社会関係を開始・継続することにあるとされる（サーリンズ 1984）。下呂石製石器は松本盆地と木曽地域、さらには岐阜県湯ヶ峰に展開した縄文人集団の社会関係を構築、維持するために交換されたと推定する。下呂石は産出地が限定され、なおかつ肉眼でも十分に識別できるほど石質に特徴がある。おそらく縄文人もそのことは認識していたはずであり、贈与側からすればどの集団に受贈したか、受贈側からすれば、どの集団から贈与を受けたかが明白であったのだろう。これは社会的紐帯を目的とした交換物として、非常に優秀な特性であったと思われる。

社会的に重要な意味を持つ下呂石製石器であるが、松本盆地の北部、安曇野市域で確認できなかった。安曇野市他谷遺跡は石材の構成が、松本盆

地の他地域と異なり、黒曜石の利用が少なく、良質な珪質頁岩の剥片が多く確認できた。石材から推察すれば、直接採取を想定した場合資源獲得領域が、交換等を想定した場合他集団との交流圏が異なっていた可能性があり、このことが影響し下呂石製石器の搬入が特に稀な地域であったのではないかと考えている。

5 おわりに

これまで、松本盆地における縄文時代中期の遺跡からの下呂石製石器出土報告は非常に少なかった。本稿で資料調査を実施した結果、当該地域における下呂石製石器の実態を把握することができ、社会的紐帯を目的とした交換によって搬入されたとの仮説を提示した。この仮説に立ち、下呂石製石器を、松本盆地における縄文時代中期の社会関係や集団論を議論する上で非常に重要な資料と位置付けたい。

本稿を草するにあたり以下の遺跡の資料を実見させていただいた。

山形村殿村遺跡、淀の内遺跡、三夜塚遺跡

塩尻市平出遺跡、峯畑遺跡、剣ノ宮遺跡

松本市南中島遺跡、内田雨堀遺跡、向畑遺跡、川西開田遺跡

安曇野市他谷遺跡、東小倉遺跡

資料実見にあたり下記の機関および個人には格別のご配慮を賜った。感謝申し上げる次第である。

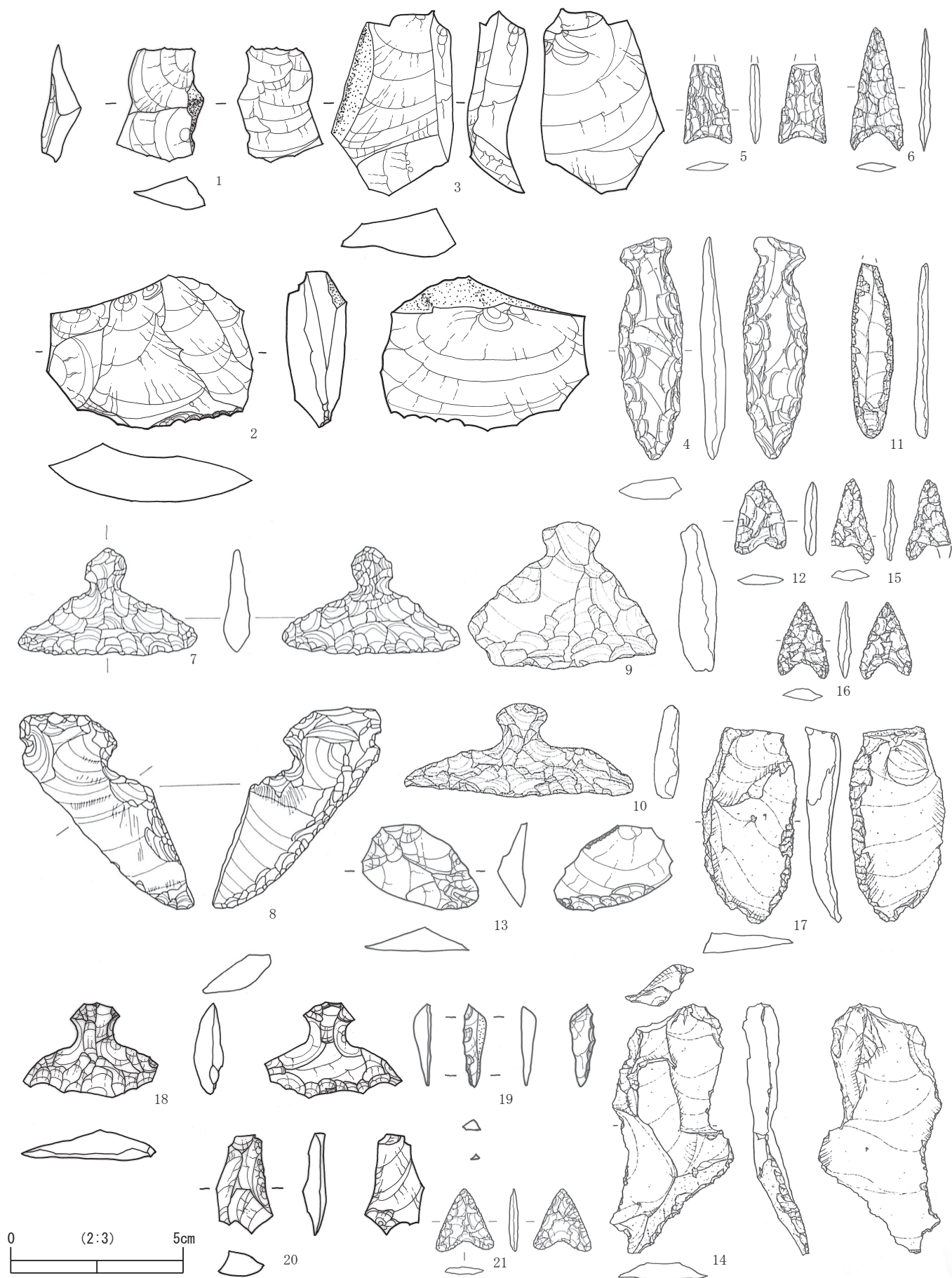
安曇野市教育委員会、塩尻市教育委員会、平出博物館、松本市教育委員会、松本市立考古博物館、山形村教育委員会、一ノ瀬幸治氏、小松学氏、土屋和章氏、直井雅尚氏、牧野令氏、村田幸子氏

註

- 1) 報告書では頁岩と記述される。
- 2) 報告書ではチャートと記述される。
- 3) 報告書では石匙はチャート、石鏃はホルンフェルス製の打製石斧と記述される。
- 4) 報告書では珪質粘板岩と記述される。

参考文献

- 阿部朝衛 1997「新潟県北部地域における縄文時代の石材使用とその背景」『帝京史学』第12号
- 阿部朝衛 2007「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』No.560
- 阿部朝衛 2014「後期旧石器時代の石材獲得戦略 - 新潟県荒川台遺跡を例として」『帝京大学文学部史学科創立30周年記念国際シンポジウム「歴史と環境」予稿集』
- 石原哲爾 1981「飛騨下呂石を石材とした石器の研究」『飛騨史学』第2巻
- 石原哲爾 1992「飛騨の地理と下呂石の動き」『飛騨のあけぼの』
- 岩田 修 1995「湯ヶ峰流紋岩と下呂石」『飛騨と考古学』
- 岩田 修 2012「飛騨の「下呂石」から見た縄文時代の長野」『平出博物館ノート』No.26
- 岩田 修 2019「下呂石研究の現状（五）縄文時代中期の下呂石」『斐太紀』第21号
- 神村 透 1995「考古学に見る飛騨と木曽の交流」『飛騨と考古学』
- 齊藤基生 2005「下呂石の動き」『地域と文化の考古学』I
- サーリンズ, M著 山内 昶訳 1984『石器時代の経済学』
- 杉本有紗 2019「朝日村山鳥場遺跡の石材利用—剥片石器編—」『長野県埋蔵文化財センター年報』35
- 中村由克 2007「下呂石の供給」『縄文時代の考古学』第6巻
- 馬場伸一郎 2018「下呂石の産出状況と流通—旧石器時代から弥生時代—」『ナイフ・石鏃・磨製石斧—石材資源とその流通—』
- 馬場伸一郎 2019「湯ヶ峰産出の「下呂石」の分類について（覚書）」『斐太紀』第22号
- 古川知明 2011「北陸の下呂石」『第4回下呂石シンポジウム2011「旅する下呂石—思えば遠くへ行ったものだ」資料集』
- 古川知明 2013「日本海域の下呂石流通」『石器石材のつどい第2回シンポジウム「富山の石材と玉髄・碧玉」予稿集』
- 山内良祐 2018「縄文時代の下呂石の利用—長良川中・上流域における検討—」『東海石器研究』第8号
- 山田 哲 2013「石材資源調達の経済学—石器インダストリーの空間配置と技術に関する考察—」『考古学研究』第60巻第3号
- モース, M著 吉田禎吾・江上純一訳 2009『贈与論』
- 山本直人 1992「縄文時代の下呂石の交易」『名古屋大学文学部研究論集』113
- ※報告書は紙幅の都合により省略した。



第1図 松本盆地における縄文時代中期の下呂石製石器
(1～3、13、18～20は筆者実測、それ以外は報告書から転載)